



Title	コソ・已然形研究史抄
Author(s)	薦, 清行
Citation	日本語・日本文化. 2011, 37, p. 35-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コソ・已然形研究史抄

薦 清行

○

コソの係り結びについての現在までの研究史をまとめる。旧稿（「終止のコソ」『国語国文』第七十五卷第五号、二〇〇六・「係りのコソ」『国語国文』第七十六卷第四号、二〇〇七）においては、コソの性質や、結びの用言の活用形の果たす役割について明らかにすることに専心し、先行研究の紹介などは行わなかつた。本稿はそれを補うものと位置づけられる。第一節・第二節では、研究史の中で重要なものに限り、個別の論文を取りあげた。個々の論文に対する意見は、できるだけその都度述べるようになつたが、研究史全体を受けた、本稿の筆者なりの考え方は、第三節にまとめている。

（本稿では係り結びについて主に論ずるため、以下煩を避けるべく、係り結び句における係りと結びの対応は、「 」に入れて略記する。例えばコソによる係り結びで、結びが形容詞連体形になる場合は、「—コソ：形容詞連体形」と表す。また、用例のうち、卷数と歌番号（旧編国歌大観番号）のみを掲げるものは、萬葉集からのものである）

一

コソによる係り結びについて、現在殆ど定説となっている考え方には、石田春昭氏・大野晋氏によつて提出されたものがある（石田春昭「コソケレ形式の本義（上・下）」『国語と国文学』第十六卷第二号・第三号、一九三九・大野晋「日本古典文法（その一～その十）」『国文学解釈と鑑賞』第二十卷第十二号～第二十一卷第三号、一九五五・同『係り結びの研究』第三章、岩波書店、一九九三）。これらはきわめて重要な論文であり、旧稿もその影響を大きく受けている。そこで、まずはこの両氏の論について、紙幅の許す限り詳しく述べておきたい。

一・一

まず石田氏の説について紹介する。

それまでの係り結び理論では、係り結びは結びの用言で終止するとされていたのであるが、石田氏はその中に、已然形部分で終止するのではなく、後句に続いていると解釈される実例があることを指摘する。具体的には、次のようなものである。

官仕への本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや。

中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。

（源氏、桐壺、一卷一〇頁）

（土佐日記、六七頁）

石田氏はこれを、実例の解釈と係り結び理論とが乖離する、大きな問題であると指摘する。そしてその問題の考察にあたつて、まず奈良時代の已然形の用法について調査を行う。その中でも特に、次のように、已然形が単独で用い

られる場合が注目されている。

1. : 引放つ 矢の繁けく 大雪の 亂れて來たれ (乱而来礼) まつろわづ 立ち向かひしも 露霜の 消な
ば消ぬべく… (卷一、一九九)

2. 家離り います吾妹を とどめかね 山隠しつれ (山隠都礼) 心ども無し (卷三、四七一)

これらの例は、已然形が単独で前提句を構成していると解釈される。已然形にはこのほかにも、係助詞カ・ヤ・ソ・コソを伴つて前提句を構成する場合や、後の時代のように接続助詞バ・ドモとともに用いられる場合も認められる。それらを総合すると、奈良時代の已然形の用法の多くは、前提句となる場合で占められることになる。このことから石田氏は、已然形には文を終止する力がなく、前提となる職分を持つていたと考えるのである。

次いで石田氏は、コソの係り結びに論を進める。ここで例に挙げられるのは、古事記歌謡の

3. : 今こそは (伊麻許曾婆) 吾鳥にあらめ (和杼理迩阿良米) 後は 汝鳥にあらむを… (古事記歌謡、三)

などの例である。石田氏は、3. のような例は、「今こそは吾鳥にあらめ」と「後は汝鳥にあらむ」という二つの命題が、心理的にも文法的にも、逆接的に密接につながつてゐる、と考える。つまり、已然形は「」でも、終止するはたらきではなく、逆接で後に続くはたらきを担つてゐる、と位置づけられるのである。

一方、コソのはたらきについては、「先行命題の提示説 (引用者注、3. の例であれば、今は「吾鳥」、すなはち意に従わない鳥のようにわがままだということ) を強く挙示し之を特異なものとして扱つて居る」という。「従つて之と対立関係にある、後続命題の提示説に就ては、先行命題とは余程ちがつた断定が下されさうだといふ予感を与へる」

のである。これはまた別の言い方で、「コソは二命題の対立を激化せしめるために、自句の逆接前提たる立場を決定してしまふ」、「逆接の「接」は已然形の受持つ所であり、之を「逆」に決定する事のみをコソが引受けて居る」とも言われている。

石田氏は、3. の例だけでなく、記紀歌謡における「—コソ：已然形」の用例を網羅的に調査する。その結果、結びの已然形部分は、コソを伴わざ单独で用いられる場合と同様、前提となる例が殆どであることが明らかになる。しかもその多くは、先に挙げた3. の例をはじめ、後に続くべきことがらに対して逆接の関係を構成するものなのである。萬葉集や古今集になると、そのような用法は徐々に割合を減じ、順接（4. の例）・中性（5. の例）の前提となる用法や、二つの命題のうち後件が省略される用法（6. の例）、単純な強調と見られる用法（7. の例）が増えてくるという。

4. : あめ天地も 寄りてあれこそ（縁而有許曾） 磐走る 淡海の國の 衣手の 田上山の ななかみやま真木さく 檜のつま
でを 大夫の 八十氏河に 玉藻なす 浮かべ流せれ（浮倍流礼） 其を取ると 騒く御民も 家忘れ 身
もたな知らず…

5. 遅速も おそはや汝なをこそ待ため（奈乎許曾麻多賣） 向かつ峯せの 椎しの小枝こやの 逢ひは違はじ（卷十四、三四九三）
(卷一、五〇)

6. 心には 忘るる日無く 思へども 人之事社（ひとのこことそ） 繁君る阿礼（しげききみにあれ）
(卷四、六四七)

7. 年のはに 春の來らば かくしこそ（可久斯已曾） 梅をかざして 楽しく飲まめ（多努忘久能麻米）
(卷五、八三三)

石田氏の論でもつとも意義深いことは、以上の事実を実例をもって示した点だと思われる。記紀歌謡の用例は文献

上さかのぼりうる最古のものであり、発生的用法にもっとも近いものであると考えてよい。その文献上最古の用例に前提的用法が多く、時代が下るに従ってその割合が減じていることが、明瞭に示されたのである。従って、コソによる係り結びは、逆接の前提的用法が発生的用法にもっとも近く、その他の用法はそこから転用されて成立したと考えられるであろう。石田氏の論の末尾部分は、その間の事情を明確に記述している。

「要するにコソは対立する二命題が已然形（引用者注・已然形単独用法）によつて連続する形式の先行命題に入られて、その対比を鮮かにした」。「これは非常に有効な修辞法であるために頻用され、遂に二者の関係は離れがたいものとなつてしまつた」。ところがやがて、「後続命題が省略されて先行命題のみでその意味を表はすに至り、遂に独立して先行命題たる実質をも失ふに至つた」のである。

一・二

大野晋氏の説は、基本的には、石田氏の説を踏襲するものと位置づけることができる。ただし、両氏の間には細かい部分に違いもあるので、ここで大野氏の説についても紹介しておきたい。

大野氏はまず石田氏と同様、已然形が単独で順接・逆接の前提句を示す語法と、バ・ドモを伴つて順接・逆接の前提句を示す語法とが、奈良時代に併存していたことを明らかにする。しかも通時的には、単独で前提句となる用法の方が古く、そこから、順接や逆接の意を明確にするために、バやドモを伴うようになったと考えている。コソの係り結びは、その古い単独用法にコソが挿入されたものと位置づけられており、ここまでには石田氏とほぼ同様の考え方と言つてよい。

さて大野氏は、あることがらを表す文に強調の言葉が挿入されると、「強調される物や観念の対比物をも明確に浮き立たせ、その叙述部までを含めて裏の観念を否定的な形で暗示することになる」という。現代語で例を挙げれば、「私は行つた」という表現において、「は」は、「私」に対する「他の人」、「行つた」に対する「行かなかつた」をそれぞ

れ浮き立たせる。その結果、全体として、「私は行った」に対して、「他の人は行かなかつた」という、対比的に位置づけられることがらが暗示されることになるというのである。

大野氏は、このような現代語の「は」のはたらきに似た性質が、上代語のコソに備わつてゐると考える。従つて「コソは、コソの承ける言葉をはつきりと強調すると同時に、それに対比する観念をも同時に引き出し浮き立たせるのであり、また、その陳述の対比をも明瞭に意識の上に引き出すのである」。そのことを示す例として挙げられるのが、次の8.である。

8. 昔こそ（昔許曾） 外よそにも見しか（外尔毛見之加） 吾妹子が 奥おくつ城きと思へば 愛はしき佐保山

（卷三、四七四）

「已然形といふ活用形は、そこで断止する活用形ではなく、順接・逆接の前提句を示すものである。（中略）しかし、助詞コソの挿入によつて、「昔」が取り立てられ、同時に「見た」も際立たされる結果、「昔コソよそのもの（縁のないもの）、と見たケレド」と逆接の意になる。上代の「—コソ：已然形」の多くが、そこで終止するのではなく、逆接的に統くものであるのは、コソと已然形との性質を二つながら考慮することによつて、説明されるのである。

なお、このようにして成立した逆接的に後に統く「—コソ：已然形」が、徐々に変質して単純な強調を表すようになった、と考える点は、大野氏も基本的に石田氏と同様である。大野氏の論の方が後に発表されたものであるから、用例の分類はより詳細になり、分類されたそれぞれの類型間のつながりも、より精密に説明されてはいるが、ここで詳説は省略したい。

一・三

以上が、大野氏・石田氏の所説の、もつとも重要な部分である。基本的な部分では、両者に大きな違いは見られないと言つてよい。

ただ、一点だけ注意しておくべき点がある。

石田氏は、「逆接法のうちには（中略）二つの同位概念が相反する属性を持つて居ることを示すものがある」と述べ、そのようなものにも已然形が用いられた、としている。これは、「AハBナレ、非Aハ非Bナリ」のように國式化されるような関係を先に想定するということである。そしてその関係中にコソが挿入されると、已然形の逆接と共働することによって、互いにその機能を最も有効に發揮したと考えるのである。

一方大野氏は、「対立する二命題」が連続する形式ではなく、任意の二命題が並置された形式に、コソが挿入され、その結果その二命題の対立関係が浮き彫りになると考える。乱暴に言えば、石田氏が対立の関係を先に想定するのに対し、大野氏は、コソが挿入されることによって、二命題の関係が対立に転ずるとするのである。大野氏が石田氏の説を強く継承することは間違いないが、この点で両者は相違すると言わねばなるまい。

これは細かい違いではあるが、石田説は、この点に限っては退けられねばならないのではないかと思われる。というのは、石田氏の想定する、已然形を用いた「AハBナレ、非Aハ非Bナリ」のような関係は、管見の限り、当時の文献には実例を見ないものだからである。次節以降で紹介する諸研究で詳細に研究されていることであるが、上代の已然形単独用法は、順接の関係を表すことが多く、逆接の関係を示すことは殆どない。とりわけ、「二つの同位概念が相反する属性を持つて居ることを示すもの」は、全く例を見ないのである。そう考えると、そこにコソが挿入されたという石田氏の考え方には、成立しにくいはずである。大野氏の考え方の方が、実例により即したものと言つてよいように思われる。

もつとも大野氏の説も、決して問題を残さないわけではないことは、断つておかねばならない。特に疑問に思われ

るの上代には、「—コソ…形容詞」が、次のように連体形で結ぶという事実があるということである。この事実は、已然形句にコソが挿入されたとする考え方からは、説明が難しいのではないかと思われる所以である。

9. 衣こそ（虚呂望虚曾） 一重も良き（赴多幣茂豫著） さ夜床を 並べむ君は 恐きろかも

（仁徳紀歌譜、四七）

大野氏はこの現象について、「日本古典文法（その四）」では、形容詞已然形は古くは連体形と同形であり、その古い形が結びに使われているのだと説明する。また『係り結びの研究』では、コソのソが係助詞ソを語源とするとして、そのソの結びであるために連体形の結びを取つてゐるのだとする。

しかしこれらは、いざれも無理のある考え方ではなかろうか。前者はその古い已然形の実例が全く見られないし、後者はコソの係り結び全体を一つの統一的な考え方から説明できないからである。そしてそれは、ひとり「—コソ…形容詞連体形」のみの問題ではなく、コソによる係り結び全体をどのようにとらえるかという問題につながつてゐるのである。

ともあれ、石田氏・大野氏の論は、コソの係り結びについての考え方には多大な影響を与え、以降の研究は、基本的にこの二氏の論を、何らかの形で継承し、あるいは批判するものとなつてゐる。次節では、その中でも、研究史を理解する上で重要なものを限つて、紹介してゆくことにしたい。

a. 已然形単独用法を、後に接続してゆくものと考へるか、それともそこで終止するものと考へるか。
 b. コソと已然形部分とが、意味的・機能的にどのような関係にあると捉えるか。

この二点は、石田氏・大野氏の論において、中心的なテーマとして論じられたものであると言つてよい。従つて、それに対してもうのような批判や継承がなされてきたのかに注目することが、研究史の把握の上で重要ではないかと思うのである。

二・一

さて、まず京極興一氏の論文（「奈良時代における已然形の一用法」『国語と国文学』第三十七卷第一号、一九六〇）を取り上げたい。この論文は、已然形単独用法について論ずるものである。京極氏は、已然形単独用法が長歌の末尾に現れる次の10.について、「長歌の結びに已然形が用いられていて、前提句とは解し得ぬもの」だと指摘する。

10. ゆきかはる 年のはじとに 天の原 振りさけ見つつ 言ひ継ぎにすれ（伊比都藝少須礼）

（巻十八、四二一五）

この例は已然形で終止すると見なすべきだ、と主張するのである。次の11.や12.も、同様に終止用法の例と見なされており、しかも通常の終止法とは異なる、特別な詠嘆を託されたものと位置づけられている。

11. よち子らと 手たづさはりて 遊びけむ 時の盛りを とどみかね 過ぐしやりつれ（周具斯野利都礼）
 蜈の腸 か黒き髪に…
 （巻五、八〇四）

12. 天地の 遠き始めよ 世の中は 常なきものと 語り継ぎ ながらへ来たれ（奈我良倍伎多礼） 天の原
ふりさけ見れば 照る月も 満ち欠けしけり：

（卷十九、四一六〇）

これらを除いた残りの已然形単用法は、一応は「既定条件を表わして下句にかかるてゆく」と解釈される。ただしそれらは、単なる条件表現ではなく、感動のこめられた特別な表現なのではないかという。一言で言えば、接続助詞を伴う已然形とは異なり、異常な事態における感動・詠嘆を表しているというのである。

たとえば、次のような例は、条件表現と考えられないわけではないが、いずれも人の死について表現するところで用いられている。

13. : 春日野を そがひに見つつ 足引の 山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ（隠益去礼） 言はむすべ
せむすべ知らに 徘徊 ただひとりして…

14. 家離り います吾妹を とどめかね 山隠しつれ（山隠都礼） 情神も無し

（卷三、四六〇）
（卷三、四七一）

これらの例の已然形単用法は、そのような特別な場合の感動を表す、詠嘆がこめられたものと考える方が良いとするのである。

このように京極氏は、終止する場合にしても、接続する場合にしても、そこに認められる感動・詠嘆の意味こそが、已然形単用法の基本的な性格であったと論ずるのである。

（ただ、已然形の本來的性格が詠嘆であるという主張は承認したい。已然形だけでなく、連体形や、時には連用形も、詠嘆的に用いられることがあるが、それらの詠嘆との違いが明確にされていないからである。むしろ、単独で用いられることの稀な条件法であったために、敢えてそれが用いられることが特別視され、結果として詠嘆的に解されるようになった、と考える方が穩

当なのではないかと思われる)

二・一

次に注目したいのは、佐伯梅友氏（『上代国語法研究』「二三の助詞をめぐりて 一「ば」—已然形につくもの—』大東文化大学東洋研究所、一九六六）の論である。これは、已然形が本来的に終止用法を持つていたのではないかと考えるものである。具体的には次のような例が挙げられ、これは「山隠しつれ」で一旦終止すると解しうるものだという。

14. 家離り います吾妹を とどめかね 山隠しつれ（山隠都礼） 情神も無し

已然形がコソの結びとなるのも、「こそ」の気持と、已然形で言い放つ気持とつりあうものがあつたからではないか」と説明されている。已然形単独の終止用法とコソとが呼応して、そこで終止すると理解するようである。

もつとも佐伯氏は、上代に已然形単独で接続を担う用法のあつたことも認めている。ただそれらは、もともと接続法だったのではなく、14. のような已然形終止用法が「はさみこみ」の形で用いられるときに、後に続くようになるというのである。ここで「はさみこみ」というのは、主に終止する形式であるものが、下に続く内容の説明のために、文中に挿入される語法のことをいう。そうして、「一般に、「はさみこみ」として用いられるものは、形はきれたものでも、何か続く気持ちを感じる」ものであり、そのために、はさみこまれた已然形単独用法が、接続に転ずることもあつたとするのである。

佐伯氏はさらに、「—コソ…已然形」についても、もともとは已然形部分で終止するものであつて、「はさみこみ」にされることによって、「続く気持ちを感じられる」のだという。已然形単独用法にしても、コソの係り結びにしても、

終止法が本来であったものが、文中にはさみこまれるようになつた結果、接続法をもつよくなつた、と理解されるのである。

（この考え方は大いに魅力的なものであるが、解決されていない問題も一点ほど残されているように思われる。

一点目は、本来終止用法を持つていたとされる他の活用形（例えば終止形や連体形）に「はさみこみ」の例が少ないので比して、已然形単用法は、かなり高い割合で「はさみこみ」されるように見えるということである。なぜ已然形は「はさみこみ」されやすかったのか、ということが疑問になるのである。

二点目。「—コソ：已然形」は、石田氏の指摘の通り、已然形部分から後に統いて行く例が上代にもつとも多く、それが時代が下るにつれて少なくなつていく。そうすると、もともと終止法であった「—コソ：已然形」が接続法をも持つよくなつた、とする佐伯氏の考えは、その実例に反するよう思われる。そして「—コソ：已然形」がもともと已然形部分で終止するのではなかつたとなれば、已然形単用法の本質が終止用法であったとする考え方も、やや説得力を失うのではなかろうか

二・三

此島正年氏（『国語助詞の研究—助詞史素描—』第五章第四節、桜楓社、一九六六）は、「已然形の本質は強く確定的に叙述すること」にあると位置づけ、「本来断続には関しないものではなかつたか」と述べている（ただ、その「確定的叙述ののぞからなる結果」、下へ続く気持ちが読み取られるものもあるという）。コソは、「ぞ」の強示の意を「いつそう強めた感じの語」と規定され、已然形の、強く確定的に叙述する性質が、コソの強示と呼応するようになつた、と考えるのである。

その上で大野晋氏などの説（「日本古典文法（その一～その十）」）、すなわちコソの係り結びを基本的に後に統いてゆくものと捉える説に対しての批判を展開する。それは、逆接で続く用例は確かに後代にいたるまで多いが、「これを以てこの構文のすべてを律することには無理があらう」というものである。已然形の部分で文は一応完結すると考

えるべきであって、「逆接になるのは「こそ」の強示の結果として意義的におのずからそうなるもの」だというのである。このことは、『あゆひ抄』の

たとへば石と玉とを人のもたるを（中略）玉をえりいだしてわが手にとりては「こそ玉なれ」といふべし

という記述を引用して、「こそ玉なれ」と表現する時には、おのずから「他の物は玉ならず」という意がすでに含蓄されている。その含蓄を特に後件として続けて表現したばあいに逆接になるのであって、むしろ逆接条件的に用いる方を第二次的用法とすべきものと思うのである」と説明されている。

（ただ、佐伯氏の論を紹介する際にも述べたことであるが、「こそ…已然形」について「逆接条件的に用いる方を第二次的用法」とするのは、やはり無理があるようと思われる。「こそ…已然形」から後に統いて行く例は、石田氏が指摘するように、上代に最も多く、時代が下るにつれて割合を減じてゆくからである。「こそ玉なれ」と「他の物は玉ならず」とをひと続きに表現するのが、コソの係り結びの原形だったのではなかろうか。

また、已然形単用法に関して、「確定的叙述のおのずからなる結果」、下へ続く気持ちが読み取られる、という考え方は難解である。しかも此島氏は、同じ已然形単用法について、接続助詞について述べる第二章第一節でも触れており、そこでは、「右のような、助詞なしの用法（引用者注・已然形単用法を指す）は、すでに言われているように、はるかな古代における条件表現法の名残であろう」と述べている。この「条件表現法の名残」と「確定的叙述」との間の関連についてこれ以上の説明はなされず、それが此島氏の論の理解をさらに難しいものにしている。

二・四

吉永登氏（「已然形についての一・二の問題」『（関西大学）国文学』第四十四号、一九七〇）の論は、已然形単用

法のうち、それまで逆接と解釈されてきた唯一の例に対し、類例に照らして順接で解釈すべきである、という見解を示すものである。その例は次の15.である。

15. 大船を 荒海に漕ぎ出で 八船たけ（八船多氣） 吾が見し児らが まみは著しも （卷七、一二六六）

この例は、吉永氏の論が出るまでは、「大船を荒海に漕ぎ出して、いよいよ漕いで行くけれど、私が逢ったあの子の目もとの様子が、ますます鮮やかに眼前に見えてくる」（『大系』、傍点は引用者による）のように、已然形部分が逆接を表していると解されることが多かつた。なぜこれを逆接と考えねばならないかと、一心に漕いでゆくならば、余計なことを考えている余裕などあるはずがない、という前提があり、実際にはそれに反して、逢った女性の面影が脳裏に浮かんでくる、という関係が想定されるからである。ところが、この歌は次に挙げる16.に類例を持ち、そこでは15.の「八船たけ」にあたる部分が、「あへきつゝ吾が漕ぎ行けば」と、順接の形式を取っている。

16. 大船に 真棍貫き下ろし いざな取り 海路に出でて あへきつゝ 吾が漕ぎ行けば（我榜行者） 大夫の 手結が浦に 海未通女 塩焼く煙 草枕 旅にしあれば 独りして 見る驗無み わたつみの 手に巻かしたる 玉だすき かけて偲ひつ（懸而之努櫛） 大和嶋根を （卷三、三六六）

ごくおおざつぱに内容を取ると、あえぐほどに一心に船を漕ぎつつ、大和に思いを馳せる、というものである。吉永氏はこの例に注目し、一心に漕いでゆくなれば余念が浮かぶはずはない、という前提がそもそも成立しないと主張する。なぜ一心に漕いでいるのに考え方ができるのか、という疑問には、次の二例をもつて解答を与えている。

17. 朝風に 船出をせむと 船人も 水手も声呼び にほ鳥の なづさひ行けば 家島は 雲居に見えぬ 吾が思へる 心なぐやと 早く来て 見むと思ひて 大船を 滉ぎ吾が行けば (許藝和我由氣婆) 沖つ波
高く立ち来ぬ:

18. 島隠り 吾が漕ぎ来れば (吾榜來者) 乏しかも 大和へ上る 真熊野の船
(卷十五、三六二七)
(卷六、九四四)

17. の例の作者は遣新羅使、18. のは山部赤人と、いずれもある程度身分のある人物である。そのうえ、17. では「船人」「水手」のような船の専門家まで登場している。従ってこれらの例は、「吾」が「漕ぐ」とされてはいるものの、作者自身が船を漕いでいたとは到底考えられないという。「自ら漕いでいないにもかかわらず、あたかも漕いでいるかのよう表現する」のが上代の表現であり、漕いでいるから余念が浮かぶはずがないという考えは当たらないと言のである。それゆえ、16. の例も、「吾が漕ぎ行けば」の部分は、「私が（本当は私の船の船人たちが）漕いで行くと…大和が偲ばれる」のように順接に解して矛盾を生じない。そして同じ考え方から、15.（八船たけ…）の場合も、「しきりに漕いで（漕がせて）行くと、タベ逢つたあの女の面影がありありと浮かんでくることだ」のように、順接に解するのが的確だと結論づけられるのである。

吉永氏の論する通り15.を順接と解することができるならば、已然形が単独で用いられる場合、逆接の意味になる確実な例は存在しないことになる。それは、逆接になることが不可能であったことをまで主張するものではないが、少なくとも上代に確実な逆接の例がないことを示した点で、大きな意義を持つのである。

(なお、吉永氏は、コソの性質については殆ど言及していない。已然形単独用法が順接の条件句を作るのに対し、逆接の条件句は「[コソ:]已然形」によつて作られていたと、ごく簡単に触れてはいるが、詳しいことは分からぬ)

二・五

最後に紹介するのは、佐佐木隆氏（「上代語の已然形と歌の表現—無助詞の用法／誰尔絶多倍／雪波布礼々之」）『萬葉集研究』第二十五巻、二〇〇一（後、『上代語構文論』第V部第一章「無助詞の已然形とその機能」に収載、武藏野書院、一〇〇三）の説である。佐佐木氏は、上代の已然形単独用法を網羅的に取り上げ、その大部分が「比較的はつきりした因果関係をもつ例」であるとする。例えば

19. 云間より 渡らふ月の 惜しけども 隠らひくれば 天伝ふ 入り日射しぬれ（入日刺奴礼） 大夫と
思へる吾も…

（卷二、一三五）

における「入り日射しぬれ」は、「ば」を付加した「入り日射しぬれば」という表現と殆ど相違なく、その前後の部分の表す内容は自然な因果関係を示していると解釈される。

明確な因果関係の見られない例は五例を数えるが、そのうち四例は、次の20.のようだ。

20. さ婚ひに 在り立たし 婚ひに 在り通はせ（阿理加用婆勢） 太刀が緒も いまだ解かずて 襲をも
いまだ解かねば 嫁子の 寝すや板戸を 押そぶらひ 我が立たせれば 引こづらひ 我が立たせれば…
(古事記歌謡、二)

因果関係こそもたないものの、複数の行為（a～c）を時間の順に列挙した表現であり、事態を並列的に描写・提示する文脈を持つと述べている。已然形単独用法はそのような環境で用いられるものだったと考えるのである。

さて以上をまとめると、上代の已然形単独用法は、後に続く表現に用いられるものであった。そうすると、末尾に

已然形を持つ表現があれば、その後に何らかの表現が続くことが予想されるようになるであろう。逆にもしもそのような続く部分が提示されないままに歌が終われば、結果的に歌末に余情がこもることになるはずである。佐佐木氏は以上のように論じ、歌末に已然形が現れる次の例は、

10. …ゆきかはる 年のはごとに 天の原 振りさけ見つつ 言ひ継ぎにすれ (伊比都藝尔須礼)

(卷十八、四一二五)

「言ひ継ぎにすれ」の部分が、「…語りぐさとして言い継いでいるが、…」のような余情のただよう表現となっている、と解している。これは、次の21.の例のような、歌末に「一連用形+テ」という形式を持つ表現と類似する効果を持つと付言される。

21. 朝日影 にほへる山に 照る月の 鮑かざる君を 山越しに置きて (山越尔置手)

(卷四、四九五)

そしてこのように検討した結果、已然形単独用法に詠嘆的終止法があつたと見なければならない実例は一例もなく、「もともと」の種の已然形にはそこで文をまともに終止させる機能がそなわっていなかつた、という見解の方が妥当である」と結論づけられるのである。その論は非常に周到であり、旧稿の已然形単独用法に対する理解は、基本的に、佐佐木氏に従つている。

二・六

以上、コソと已然形の用法に関する主な研究を概観した。次節、二つの問題に関して、研究史を承けた本稿の筆者

の考え方を述べて、稿を閉じることにしたい。

三

第二節冒頭に述べたように、コソの係り結びについて考える際には、a. 已然形単独用法の持つ性質と、b. コソの持つ性質との、両方に注目する必要があると思われる。

そのためここでもまず、已然形単独用法の持つ性質について考える。前節に挙げた論のうち、京極氏（二・一節）・佐伯氏（二・二節）・此島氏（二・三節）は、已然形に終止用法があつたことを認める立場に立っていた。これに対し、吉永氏（二・四節）・佐佐木氏（二・五節）は、已然形を基本的には後に続く形式と考え、通常の意味での終止用法は認めていなかつた。

ここで注意しておきたいのは、終止用法を認める佐伯氏・此島氏も、全ての用例が已然形部分で終止するとは主張しておらず、後に続いてゆく例も存在すること述べていることである（京極氏は已然形の本質を詠嘆に求めるのであるが、それが首肯しがたい考え方であること、二・一節に述べた通りである）。

しかし、各節で逐次説明してきたように、已然形がもともとそこで終止する形式であつたとすると、それが後に続いてゆく部分に用いられるという現象は、説明が困難なものになるのではないかと思われる。

逆に、已然形がもともと後に続く形であつたとすると、佐佐木氏が述べるように、それが文末に用いられて何らかの余韻を残す用法が生ずることも、大きな問題とは思われない。このような用法は、あくまで修辞上のものであり、通常の意味での終止用法とは異なると思われるからである。そうすると、已然形の単独用法は、もともと後に続いてゆく形式であつたと考えるべきではないかと思われる。

ではその続ぎ方は、いかなるものであつたのだろうか。已然形単独用法が少なくとも上代に確實な連接の例を持た

ないことを示した吉永氏の論を承けて、山口佳紀氏（「古代条件表現形式の成立」『国語と国文学』第四十六卷第十二号、一九七二）は次のように述べている。「已然形は、（中略）本来的には、順接・逆接というより、単に確定条件であることを示すにとどめたものであつたろう。しかしながら、順接か逆接かというような論理的関係が問題にされる段階になれば、特に言語的標識のない限り、順接的になるのが自然だつたと思われる」。このような考え方につるのが、穏当なのではなかろうか。

二つめの問題、すなわちコソの持つ性質について考えを進めたい。もつとも、已然形単独用法や「—コソ…已然形」を後に続いてゆく形式ととらえる立場からは、石田氏・大野氏の説と大きく異なるような考え方は、現在のところ示されていないようである。第一節冒頭で、両氏の説が殆ど定説になつていて述べた通りである。ただ、佐伯氏・此島氏は、已然形の本質を終止用法に見出す立場から、石田氏・大野氏に異議を提出している。

此島氏の説は、已然形の持つ強い「確定的叙述」が、「—コソ」の強く指示する性質と呼応したと考える。また佐伯氏の説は、コソ自体の性質については「已然形で言い放つ氣持とつりあう」とする程度で、はつきりとは分からないのであるが、恐らく強調の意ととらえているものようである。

しかし、佐伯氏・此島氏のように解する限り、「—コソ…已然形」は、「確定的叙述」や強調を本質とすると解ざざるを得ないはずである。そして「—コソ…已然形」を本来終止する用法と見、それが接続用法に転用されるようになつたとする考え方は、先述の通り、石田氏の調査した実例から見てはつきりと無理がある。それゆえ、佐伯氏・此島氏の説は、退けられるべきものなのではないかと思われる。

ここまで述べてきた研究史のまとめから明らかであろうが、本稿でも、基本的な考え方は、石田氏・大野氏に拠るべきと考える。それは、コソの性質・已然形単独用法の性質の、いすれについても言えることである。ただその一方、「—コソ…已然形」における両者の関係についてだけは、両氏とは異なる考え方をすることを、強調しておきたい。

簡単に言えば、已然形単独用法が後に続くはたらきを持つことは認めるが、それはたらきが「AコソB（ダガ）、非A（ハ）非B」の関係をもたらすという点には賛同しない。そうではなく、コソという助詞が「AコソB（ダガ）、非A（ハ）非B」という対比的構成と密接に結びついているのだと考えるのである。その構成における接続関係を明確に示すために、動詞の結びの場合には、接続する形式である已然形を取っている、と解釈するのである。

そのことを、旧稿「係りのコソ」では、「—コソ…形容詞連体形」や「—コソ…名詞」の形式において、逆接で後に続く例があることを根拠に論証を試みた。コソの係り結びにおける接続関係が、已然形の結びに依存していないことを示そうとしたものである。またそれに先立つ「終止のコソ」では、かかってゆく結びの存在しない終止用法においてさえも、「AコソB（ダガ）、非A（ハ）非B」という対比的構成を抜きには歌の解釈が成立しない例があることを示した。それによって、コソとその構成との結びつきが、結びの已然形に支えられているものではなく、他ならぬコソの本質的性質によるものであることを明らかにしようとしたのである。

本稿は研究ノートであり、コソや已然形について新しい知見を含むものではない。単に、それらについての研究の歴史を概観するだけのものである。だがその過程で筆者は、石田氏・大野氏の研究が明らかにしたことがどれほど大きな意義を持つかを再確認することになった。それでも我々は先人の到達した境地を引き継いで研究を続けることができるのであるから、倦まず努力を繰り返せば、やがては係り結び研究にまた新たな知見を加えられると信じたい。

ただそのとき危惧されるのは、自らがそれらの研究に対して重大な誤解をしているのではないか、間違った小径をあてどなくさまよっているのではないか、ということである。その業績が偉大であればあるほど、その危惧は深刻になる。特に大野氏の『係り結びの研究』は、繰り返し読むたびに新しく気づかされることがあり、おそらくは未だ理解の行き届かないところの方が多いであろう。ここに紹介した他の論文についても、誤った理解からの外れな発言があったかもしないし、重要な論文でありながら、取り上げられなかつたものも多い。全て諸賢のご批正を請いつつ、擱筆する。

引用に用いた文献は以下の通り（萬葉仮名文献からの用例は、注目部分以外は適宜表記を改めた）。散文作品は、引用に用いた文献の頁数を示した。

萬葉集『萬葉集本文編』（旧版）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之、塙書房、一九六三
 古事記歌謡 日本古典文学大系『古代歌謡集』土橋寛・小西甚一（古事記歌謡は土橋氏の執筆）、岩波書店、一九五七
 土佐日記 日本古典文学全集『土佐日記』蜻蛉日記 松村誠一・木村正中・伊牟田経久（土佐日記は松村誠一氏の執筆）、小學館、一九七三

源氏物語 日本古典文学全集『源氏物語』一〇六 阿部秋生・秋山慶・今井源衛、小学館、一九七〇・一九七六
 あゆひ抄 勉誠社文庫16『あゆひ抄』中田祝夫解説、勉誠社、一九七七（引用に際して適宜濁点を施し、仮名を漢字に改めた）

萬葉集の注釈書き示すのに、本文中では以下の略称を用いた。

日本古典文学大系『萬葉集』（一～四）高木市之助・五味智英・大野晋 岩波書店、一九五七・一九六二・『大系』

本文中に挙げたものの他、以下のような諸論考に多くの学恩を蒙っている。

足立滋乃「已然形の機能について」『国文』六、一九五六

内田賢徳「係助詞ゾの終止用法——喚体性と述体性をめぐって——」『ことばとことのは』八、一九九一

遠藤和夫「上代文献にみえる「コソ已然形」の係結びと已然形終止の文」『和洋女子大学紀要』一五、一九七一

川端善明「係結の形式」『国語学』一七六、一九九四

近藤泰弘「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』五一二、一九八六

酒井秀夫「萬葉集の「こそ」（一）—文末の「こそ」」『金城学院大学論集』二二、一九六三

酒井秀夫「萬葉集の「こそ」（二）—文中の「こそ」」『金城学院大学論集』二五、一九六四

佐佐木隆「萬葉集」—番歌の「我許背歎告目」『學習院大学文学部研究年報』四二、一九九六（後、『上代語の構文と表記』第II部第一章「我許背歎告目家呼毛名雄母」に収載、ひつじ書房、一九九六）

竹内美智子「係助詞「こそ」について」『平安時代和文の研究』第五章、一九八六、明治書院

半藤英明「古典語「こそ」の働き——取り立ての観点から——」『国学院雑誌』九四一六、一九九三
船城俊太郎「係結び」『国文法講座3古典解釈と文法』明治書院、一九八七

〈キーワード〉文法、係り結び、上代語、古代語、奈良時代語

A Brief History of the Research on “Koso” and the Izenkei(Realis)

Kiyoyuki TSUTA

This paper provides an overview of the history of research on the izenkei(realis) and kakarimusubi with “koso”.

In these subjects, the theory that is developed by ŌNO Susumu and ISHIDA Haruaki, is quite a most common belief. They clarify that the original characteristic of the izenkei(realis) is to join two clauses. And, they argue that kakarimusubi with koso, in which koso triggers the izenkei(realis) of the predicate, also join two clauses.

Since their arguments are important, most of the later articles refer to their theory in any way.

In this research note, I take up the papers of KYŌGOKU Okikazu, SAEKI Umetomo, KONOSHIMA Masatoshi, YOSHINAGA Minoru and SASAKI Takashi.

KYŌGOKU refutes ŌNO and ISHIDA, while he says that the izenkei(realis) represents an exclamation in a special situation.

SAEKI and KONOSHIMA also criticize ŌNO and ISHIDA. They emphasize that the role of the izenkei(realis) is to express something definitely, and that sometimes it is used at the end of a sentence. They think that the izenkei(realis) is used in kakarimusubi with “koso” because the characteristic of izenkei(realis) matches “koso”’s property.

YOSHINAGA and SASAKI re-examine whole alone-usage of izenkei(realis) in Nara era, and find that there is no example which is properly placed at the end of a sentence. So they come to the conclusion that the izenkei(realis) isn’t commonly used to close a sentence.

I think that we cannot disprove the theory of ŌNO and ISHIDA, after I checked their evidences. We can, however, approach this problem closer, if we observe the whole kakarimusubi with “koso” carefully. In other words, we have to research on kakarimusubi with predicate adjective and predicate nominative.